CDC Watch

2024 October 328

株式会社メディコン

矢野 邦夫 先生
浜松市感染症対策調整監
浜松医療センター感染症管理特別顧問

'81年 名古屋大学医学部卒業。名古屋第二赤十字病院、名古屋大学病院を経て、'89年 フレッドハッチンソン癌研究所、'93年 県西部浜松医療センター（2011年4月より「浜松医療センター」に病院名変更）。'96年 ワシントン州立大学感染症科エイズ臨床、エイズトレーニングセンター臨床研修修了。'97年 感染症内科長／衛生管理室長、'08年 副院長、'20年 院長補佐、'21年4月より現職。

ホームページでも、公開しています。
メディコン CDCWatch 検索

母親への RSV ワクチンと乳児へのニルセビマブの投与について

2023～24年のRSウイルス（RSV）流行期は、米国において乳児の重症RSV感染症の予防に「母親へのRSVワクチン」と「乳児へのニルセビマブ」が推奨された最初のシーズンであった。これらの製剤がどの程度投与されたかについての報告が週報（MMWR）に記載されているので紹介する（1）。

はじめに

- RSVは、米国の乳児の入院の原因として最も多い。そして、RSV関連の入院率が最も高いのは生後3か月未満の乳児である。
- すべての乳児をRSV関連下気道疾患から守るために、予防接種実施諮問委員会（ACIP:Advisory Committee on Immunization Practices）は、「妊娠32～36週の妊婦に、RSVワクチンを9～1月の季節的接種で単回接種（生涯で1回）する」「米国本土の殆どの地域において、10月～3月のRSVシーズン中に生まれたか、最初のRSVシーズンを経験した生後8ヵ月未満の乳児にニルセビマブ（RSV抗体）を投与する」を推奨している。ほとんどの乳児にとって、まれな状況を除いて、両方の製剤は必要ない。
- この報告書は、2023～24年のRSV感染症シーズン中に「母親へのRSVワクチン接種」「乳児へのニルセビマブ投与」および「いずれかの製剤」によって保護された乳児の割合を推定するものである。

調査

- CDCは、2024年3月26日から4月11日まで、インフルエンザワクチン接種率を確認するためのインターネットパネル調査を実施した。そこには、母親のRSVワクチン接種と乳児へのニルセビマブ投与に関する質問が含まれていた。
- 2023年8月1日以降のいずれかの時点で妊娠した18～49歳の女性が調査の対象となった。対象女性2,473人のうち、2,266人（91.6%）が調査を完了した。最終的な分析サンプルには、現在妊娠している女性と最近妊娠した女性2,263人が含まれた。

データ分析

- 妊娠中および最近妊娠した女性におけるRSVワクチン接種率の分析は、2023年9月1日から2024年1月31日までの任意の時点で妊娠32～36週であった678人の女性に限定された。
- 妊娠中にRSVワクチンを接種した女性は、ワクチン接種のタイミングに関係なくワクチン接種を受けたとみなされた。
- 乳児へのニルセビマブの投与率および母親または乳児の免疫化によって保護された乳児の割合の分析が、2023年8月1日から2024年3月31日までに生児を出産し、乳児が2023年10月1日から2024年3月31日の間にニルセビマブの投与を受ける資格があった866人の女性で評価された。
- 母親がRSVワクチンを接種したか、乳児がニルセビマブを投与されたと母親が報告した場合、乳児は重症RSV感染症から保護されているとみなされた。
- 母親のRSVワクチンまたは乳児のニルセビマブによる免疫化の希望を分析には、現在妊娠中の女性および最近生児を出産した女性2,023人が含まれた。

結果

母親のRSVワクチン接種率

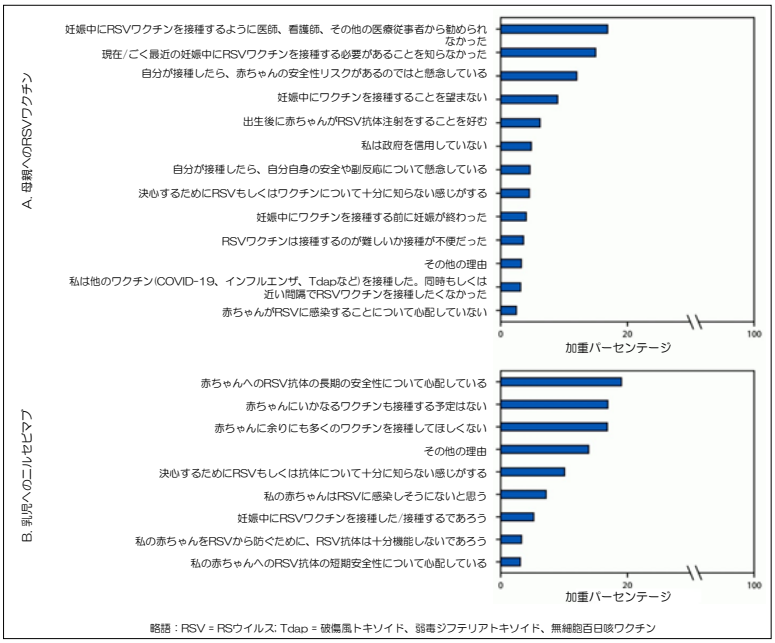
- 対象女性678人のうち、母親のRSVワクチン接種率は全体で32.6%であり、民間または軍事保険加入者（38.9%）の方が公的保険加入者（28.0%）よりも有意に高く、貧困ライン以上の生活を送っている人（35.0%）の方が貧困ライン以下の生活を送っている人（26.4%）よりも有意に高く、大学卒業以上の学歴を持つ人（50.1%）の方が大学卒業以下の学歴を持つ人（28.7%～32.7%）よりも有意に高く、母親または乳児のRSV免疫化について医療提供者の推奨を受けた人（56.7%）の方が推奨を受けなかった人（1.9%）よりも有意に高かった。
- ワクチンを接種した女性の大多数（54.1%）は、産婦人科医の診療所で接種した。

乳児のニルセビマブの投与率

- 生児を出産した女性866人のうち、乳児のニルセビマブ投与率は全体で44.6%で、母親が就労している乳児（48.5%）の方が母親が就労していない乳児（38.7%）よりも有意に高く、また、母親または乳児のRSV免疫化について医療提供者から推奨を受けた乳児（58.7%）の方が推奨を受けなかった乳児（28.3%）よりも有意に高かった。
- 全体として、乳児の55.8%がRSVワクチン、ニルセビマブによって保護され、乳児の14.2%がそれらの両方によって保護された。

ワクチンを接種しない理由

- ワクチンを接種しなかった主な理由として最も多く報告されたのは、「①医師、看護師、またはその他の医療専門家からワクチン接種の推奨を受けていない（16.9%）」「②妊娠中にRSVワクチン接種が必要であることを知らなかった（15.0%）」「③乳児への安全性リスクを心配している（12.0%）」であった（図）。
- ワクチン未接種の妊婦および最近妊娠し生児を出産し、乳児にニルセビマブを投与しなかった女性が、おそらくまたは確実に投与しない理由としては「①乳児に対するニルセビマブの長期安全性に懸念がある（19.1%）」「②いかなるワクチンも乳児に接種させる予定がない（16.9%）」「③乳児にあまり多くのワクチンを接種させたくない（16.8%）」が挙げられた（図）。



図．(A) ワクチン未接種の妊婦または最近妊娠した女性が RSV ワクチンを接種しない主な理由（N=433）および（B）保護されていない乳児に対する RSV 抗体（ニルセビマブ）をおそらくまたは確実に投与しない理由（N=240）—インターネットパネル調査、米国、2024 年 4 月

母親の製剤嗜好

- 製剤の希望を決定する際に、回答者の38.1%が妊娠中のRSVワクチンを希望し、27.8%が乳児のニルセビマブを希望し、21.3%は希望はなく、12.8%は母親のRSVワクチンも乳児のニルセビマブも希望しないと回答した。
- 母親のRSVワクチンを希望する回答者のうち、47.8%は母親のワクチン接種の方が安全であると考え、30.2%は乳児が注射を受けすぎることを心配し、30%は母親のワクチン接種の方が効果的であると考えていた。
- 乳児にニルセビマブを希望する回答者のうち、43.6%はより効果的であると考え、32.4%はより安全であると考えていた。

考察

- 乳児のRSV感染症を予防するために新しい免疫化製剤が推奨された最初のシーズンにおいて、対象となる妊婦のRSVワクチン接種率は32.6%、乳児のニルセビマブ投与率は44.6%であり、乳児の55.8%がどちらかまたは両方の製剤によって保護されていたことが判明した。
- 医療提供者の推奨を受けることは、母親と乳児の両方の免疫化と強く関連した。
- 妊婦の約半数は、母親へのRSVワクチンや乳児へのニルセビマブについて、医療提供者の推奨を受けていないと報告している。このことは、乳児を重症RSV感染症から守る機会を逃していることを示している。

［文献］
1. Razzaghi H, et al. Maternal Respiratory Syncytial Virus Vaccination and Receipt of Respiratory Syncytial Virus Antibody (Nirsevimab) by Infants Aged <8 Months — United States, April 2024
https://www.cdc.gov/mmwr/volumes/73/wr/pdfs/mm7338a2-H.pdf

株式会社メディコン
カスタマーサービス www.bdj.co.jp/s/cs/

bd.com/jp/

BD, the BD Logo and all other trademarks are trademarks of Becton, Dickinson and Company or its affiliates.
© 2024 BD. All rights reserved.